# The World of Unfamiliar Ship Models that no one Ever Knew About

# ジミ艦2

## ～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～

米波保之

大日本絵画

The World of Unfamiliar Ship Models that no one Ever Knew About

# ジミ艦2

～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～

米波保之

大日本絵画

## 異色のコレクション～“ジミ艦”ワールドへようこそ！

ジミ艦ニストの皆様へ、二冊目の『ジミ艦』を贈ります。『ジミ艦～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～』刊行から6年、コツコツと作りためて来たジミな奴らが、総勢35隻。前回よりもさらにパワーアップして、皆様をお迎えいたします。奇しくも平成から令和へ、時代が変わる節目での船出となったことに喜びを禁じ得ません。

私が“ジミ艦”と名付けた彼女たちには、いろいろな個性があります。生まれた時からジミ艦だったもの、生まれた時は注目されていたのに、いつの間にかジミ艦になってしまったもの、はたまた運命の悪戯で、生まれてくることすらできなかったもの……。中には「私はジミ艦じゃないわ」って主張したいフネもあるかも知れません。そんな彼女たちをひとつひとつ形にしてみてわかったことは……？ジミじゃないんですね。特殊な任務に適した特殊な形態をもつ彼女たちは、どれも面白い形をしていて、ジミなものはひとつもなかったのでした。現代の戦闘艦はステルス化などで主兵器を隠していたり、個性を消すデザインになりつつありますが、ジミ艦群は見ただけでそれとわかる、任務に特化した装置類を備えていたり、見ていて飽きない面白さがあるのです。

そして、ジミ艦群をコレクションする楽しさは、その数の多さにあります。例えば帝国海軍の有名艦と言えば戦艦、巡洋艦、航空母艦……指折り数えていくと、それほど多くないですね。それではジミ艦といったら、後方支援の特務艦群や、戦闘艦といっても主力艦の補助に回るもの、護衛や哨戒任務にあたるもの等々……数え切れないほどの面白い形をしたフネたちがいます。そしてこうしたフネたちは、世界中でそのジミな任務に励んでおります。ということは……、ネタはまだまだ尽きないっていうこと。

2005年に創刊された『ネイビーヤード』での連載開始から足掛け14年。“ジミ艦隊”たちも60隻を数える大艦隊になったのですね。作例の製作、執筆が終わり、『ネイビーヤード』が発売になり手元に届くと、まっ先に読むのが読者の皆様からのお便りのコーナーでした。これは、創刊号からずっと変わらぬ儀式のようなもので、ジーンとしたり、頑張らねばと気持ちを引き締められたり。皆様のお声に励まされ、今日まで続けることが出来ました。

しかし14年も続けばいろいろなことがあるものです。近年、ジミ艦たちを取り巻く環境は大きく変わりました。その原動力となったのはブラウザゲーム「艦隊これくしょん -艦これ-」の存在でしょう。ゲームの中でも人気キャラであり、“間宮羊羹”で知られる給糧艦「間宮」など、テレビ番組で特集が組まれるほどになりました。工作艦「明石」、水上機母艦「秋津洲」、給油艦「足摺型」、給油艦「速吸」、潜水母艦「大鯨」、外国艦に目を向けても、イギリスの巡洋艦や航空母艦など……。まさかプラモデルになるなんて思ってもみなかったジミ艦たちが手に入る時代が来るとは、ゲームをしない純粋培養のモデラーにとっても、それは福音だったでしょう。今や、見渡せば作りたいものはいくらでもあります。

だがしかし、メディアに登場して、プラモデルも発売されメジャー路線に躍り出ようと、「ジミ艦」が流行語大賞を取ろうと（あ、それはないか……）、ジミ艦はジミ艦に変わりありません。生まれついての縁の下の力持ち、シブい脇役俳優としていぶし銀のような鈍い光を放ち続けるのが彼女たちジミ艦なのです。そんな彼女たちを一つでも多く掘り起こし、その姿を模型で再現し、物語を語っていくのが、本書刊行のためにお力をお借りした多くの方々、手に取ってくださった読者の皆様方に報いることであると信じ、まだまだ作りためていく所存であります。ありがとうございました。

米波保之

# The World of Unfamiliar Ship Models that no one Ever Knew About ジミ艦2 ～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～


**第1部　ジミ艦！ スタンダード**

帝国海軍給油艦 足摺 …… 6
アメリカ海軍駆逐艦スチュワートDD-224
／帝国海軍第102号哨戒艇 …… 9
帝国海軍航空母艦 神鷹 …… 12
帝国海軍給糧艦 伊良湖 …… 17
帝国海軍千鳥型水雷艇 …… 20
帝国海軍二等巡洋艦 八十島 …… 23
帝国海軍潜水母艦 大鯨 …… 26
海上自衛隊護衛艦 わかば
／帝国海軍駆逐艦 梨 …… 29
海上自衛隊給油艦 はまな …… 32
帝国海軍敷設艦 厳島 …… 35

**第2部　ジミ艦！ インコンプリート**

フランス海軍戦艦 ジャンバール …… 40
帝国海軍航空母艦 伊吹 …… 44
帝国海軍戦艦 金剛代艦 藤本案
／平賀案 Design“x” …… 48
帝国海軍大型巡洋艦 超甲巡 B-65 …… 52

**第3部　ジミ艦！ オールドタイマー**

帝国海軍巡洋艦 筑紫
／清国北洋水師快船 超勇 …… 56
帝国海軍防護巡洋艦 畝傍 …… 59
帝国海軍駆逐艦 松（初代）
／橄欖（イギリス海軍駆逐艦ネメシス）…62
帝国海軍航空母艦 若宮 …… 65
帝国海軍敷設艦 常磐 …… 68

**第4部　ジミ艦！ ヨーロピアン**

スウェーデン海軍航空巡洋艦 ゴトランド…72
イタリア海軍重巡洋艦 ザラ …… 75
イギリス海軍駆逐艦 キャンベルタウン …78
ポーランド海軍護衛駆逐艦 クヤヴィアック
／イギリス海軍護衛駆逐艦 バズワース …82
イギリス海軍フラワー級コルベット
／イギリス海軍リバー級フリゲート…… 86
イギリス海軍航空母艦 ユニコーン …… 89
フランス海軍航空母艦 ベアルン …… 92

# 本書のコンセプト

本書は『ネイビーヤード』誌の連載コーナー『ジミ艦！～マイナー艦船の世界』において発表した、2012年秋刊行の21号から2019年春の40号までの作例を中心に、同誌の巻頭特集や姉妹誌の月刊『モデルグラフィックス』に掲載されたもの、さらに本書のための作りおろし作例を加え編み直したものである。

連載開始当初からの本企画の意図は、模型メーカーに商品化されそうもないマイナーな艦船にスポットを当て、模型として再現。知られざるエピソードを紹介していくというものだったが、時ならずして「艦隊これくしょん -艦これ-」人気で再燃した平成の艦船模型ブームで、マイナーな艦もキット化されるようになった。

それらの新キットの中からとりわけマイナーなものは積極的に取り上げ、単なるブームに終わらない、“彼女たちがいかにジミだったか？”にスポットを当てていくよう努めた。

また、実際に竣工していれば決してジミ艦ではない、幻の未成艦たちも「ジミ艦インコンプリート」のコーナー設けて紹介している。ネイビーヤード誌の連載第一回の冒頭に“華々しい戦果もなく黙々と後方の任務に徹したフネ……時代背景ゆえに消えてゆかねばならなかった幻のフネ……”たちがジミ艦であると定義したのは、彼女たちがどんな船か知っているのは、やはりジミ艦好きのマニアの人々であろうと踏んでいたからだ。私自身も、想像図しかないフネたちを立体化するのは刺激的な経験であった。

「ジミ艦ヨーロピアン」と題したコーナーには、イギリス海軍他の、欧州を戦いの場としていたフネたちをまとめた。中には巡洋艦、航空母艦といったメジャー級も登場するが、日本国内での扱いはまだまだマイナーなものだ。インジェクション・プラスチックキットとしては未発売のものが多く、興味を持っていただける方が増えれば、模型メーカーも動いてくれるかも？と願って……。本書の作例には、いわゆる超絶技巧を駆使した精密作品は登場せず、製作者の私自身としては、いわば艦の似顔絵（肖像画ではない）を描くような感覚で製作したものである。古いアルバムのページをめくるような、どこか牧歌的な気持ちで眺めて頂ければ幸甚である。

**米波保之**
よねなみやすゆき

静岡市在住。家業の茶道具古美術品店経営の傍ら、1/700艦船模型製作および執筆活動を展開。
1997年に地元のガレージキットメーカーでレジンキャストキットの原型師としてデビュー。以降、ピットロード社ハイモールドシリーズの原型や青島文化教材社の小冊子付き限定キット「ガイド&ディテール」シリーズの小冊子の執筆などを手掛け、大日本絵画月刊『モデルグラフィックス』でライターとしてデビュー。2005年、同社『ネイビーヤード』創刊号より『ジミ艦！』の連載を開始。2016年より月刊『モデルアート』にペンネームの鯨水庵八十八名義で『艦船諸国漫遊記』の連載を開始、現在に至る。執筆活動のほか、地元模型メーカーの艦船プラモデルの監修なども手掛ける。著書に『ジミ艦～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～』。艦船研究家畑中省吾氏との共著書に『日本海軍軽巡洋艦1/700 やっぱり軽巡洋艦が作りたい！マスターモデリングガイド』（いずれも大日本絵画 刊）


## 初出掲載誌紹介

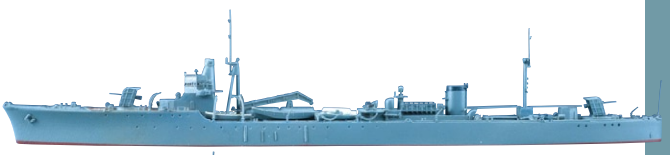
**フランス海軍戦艦 ジャンバール**
ネイビーヤード22号／2013年3月
**帝国海軍防護巡洋艦 畝傍**
ネイビーヤード22号／2013年3月
**帝国海軍駆逐艦 松（初代）**
**／橄欖（イギリス海軍駆逐艦ネメシス）**
ネイビーヤード23号／2013年7月
**帝国海軍航空母艦 若宮**
ネイビーヤード24号／2013年11月
**帝国海軍給油艦 足摺**
ネイビーヤード25号／2014年3月
**スウェーデン海軍航空巡洋艦 ゴトランド**
ネイビーヤード26号／2014年7月
**アメリカ海軍駆逐艦スチュワートDD-224**
**／帝国海軍第102号哨戒艇**
ネイビーヤード27号／2014年11月
**帝国海軍敷設艦 常磐**
ネイビーヤード28号／2015年3月
**帝国海軍航空母艦 神鷹**
ネイビーヤード29号／2015年7月
**海上自衛隊護衛艦 わかば／帝国海軍駆逐艦 梨**
ネイビーヤード30号／2015年11月
**帝国海軍給糧艦 伊良湖**
ネイビーヤード31号／2016年3月
**ポーランド海軍護衛駆逐艦 クヤヴィアック**
**／イギリス海軍護衛駆逐艦 バズワース**
ネイビーヤード32号／2016年7月
**イタリア海軍重巡洋艦 ザラ**
ネイビーヤード33号／2016年11月
**帝国海軍戦艦 金剛代艦藤本案 ／平賀案 Design “x”**
ネイビーヤード34号／2017年3月
**帝国海軍千鳥型水雷艇**
ネイビーヤード34号／2017年3月
**イギリス海軍駆逐艦 HMSキャンベルタウン**
ネイビーヤード35号／2017年7月
**帝国海軍大型巡洋艦超甲巡 B-65**
ネイビーヤード35号／2017年7月
**帝国海軍二等巡洋艦 八十島**
ネイビーヤード36号／2017年11月号
**帝国海軍航空母艦 伊吹**
ネイビーヤード36号／2017年11月号
**帝国海軍潜水母艦 大鯨**
ネイビーヤード37号／2018年3月号
**海上自衛隊給油艦 はまな**
ネイビーヤード38号／2018年7月号
**イギリス海軍フラワー級コルベット**
**／イギリス海軍リバー級フリゲート**
ネイビーヤード39号／2018年11月号
**イギリス海軍航空母艦 ユニコーン**
ネイビーヤード40号／2019年3月号
**帝国海軍巡洋艦 筑紫／清国北洋水師快船 超勇**
モデルグラフィックス339号／2013年2月号
**フランス海軍航空母艦 ベアルン**
モデルグラフィックス399号／2018年2月号

第1部

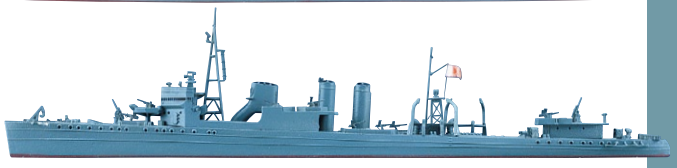
# ジミ艦! スタンダード

**スタンダードすなわち標準的なジミ艦とは？**
**ジミな任務を黙々とこなす働き者。**
**あるものは戦場で兵士に活力を与え、またあるものは兵器をせっせと運ぶ。**
**海外から囚われてきたもの、攻撃力を欲張ってひっくり返ったものもある……。**
**海戦史では語られない彼女たちこそ「ジミ艦」の主役。**
**ファニーフェイスな個性派女優たちの勢ぞろい！**

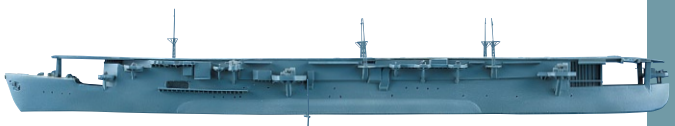

帝国海軍給油艦 足摺 6



アメリカ海軍駆逐艦スチュワートDD-224 ／帝国海軍第102号哨戒艇 9



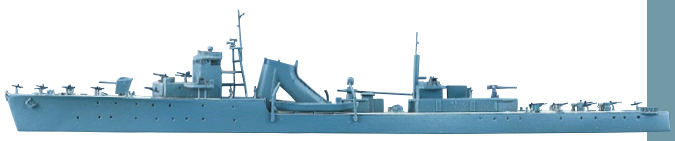
帝国海軍航空母艦 神鷹 12



帝国海軍給糧艦 伊良湖 17

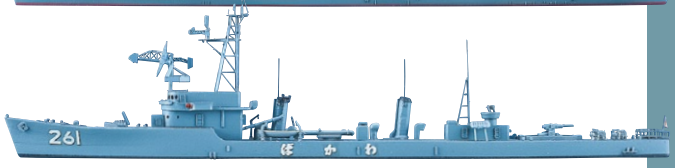
帝国海軍千鳥型水雷艇 20

帝国海軍二等巡洋艦 八十島 23

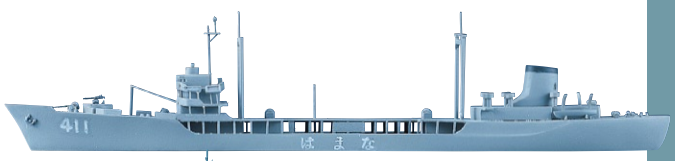


帝国海軍潜水母艦 大鯨 26

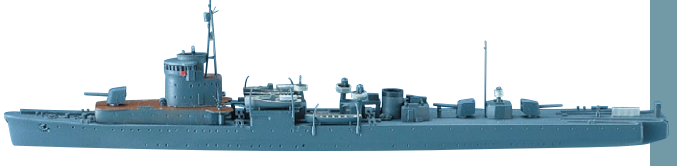
海上自衛隊護衛艦 わかば／帝国海軍駆逐艦 梨 29




海上自衛隊給油艦 はまな 32




帝国海軍敷設艦 厳島 35



帝国海軍給油艦 足摺
ピットロード1/700インジェクションプラスチックキット
Imperial Japanese Navy Oiler (Combat support ship) Ashizuri
Pitroad 1/700 Injection-plastic kit.

# 帝国海軍給油艦 足摺

## Imperial Japanese Navy Oiler (Combat support ship) Ashizuri

**世界初の航空母艦専用の戦闘補給艦として**
**天下無敵の帝国海軍機動部隊をサポートするはずだった**
**新型の軽質油運搬艦たちを待っていた過酷な運命とは？**

### ■艦隊決戦と補給艦

言うまでもなく、戦闘に携わる艦船に積載できる燃料や武器弾薬や食糧などには限りがあり、また戦闘によって刻々と消耗していくものであるから作戦が長期に渡ればそれらの物資の補給は必要不可欠となってくる。帝国海軍の対米戦略は艦隊決戦を前提としたものだったが、太平洋を西進してくる優勢なアメリカ艦隊を航空機や酸素魚雷で漸減させて勢力を殺ぎ、日本近海において主力艦隊の砲火力でとどめを刺すという筋書きの“漸減邀撃作戦”であったから、遠隔地の戦闘艦に武器弾薬を補給する特務艦である給兵艦の整備にはあまり熱心でなかったが、戦艦を中心とした艦隊の補助兵力とみなされていた空母専用の補給艦の整備は早くから企図していた。

空母の主兵器たる航空機には、燃料の軽質油のほか、爆弾、魚雷、機銃弾等々、一回の戦闘で消耗する物資が非常に多く、また激戦となれば損傷した機体の修理、発動機の交換なども必要となる。そうしたニーズから1939年（昭和14年）のマル四計画で建造が決定された第103号艦（後の「洲埼」）は給油艦（軽質油運搬艦）に区分されていたが、その実態は空母搭載機のためのあらゆる消耗品を補給する運送艦であった。折しも大型空母翔鶴型2隻が建造中であり、同じマル四計画の建造予定艦には130号艦、後の「大鳳」も含まれていた。1940年（昭和15年）になると、はっきり対米戦を意識した通称マル臨計画が策定された。これは層が薄かった中型、小型潜水艦や特務艦などの補助艦艇群、総計55隻の建造計画で、6隻の軽質油運搬艦が含まれていた。「洲埼」の姉妹艦4隻（233～236号艦）と、それより一回り大型の219号、220号艦。後の「足摺」、「塩屋」の姉妹である。

### ■機動部隊の盛衰と軽質油運搬艦

1941年（昭和16年）、対米戦が開戦すると海戦の主役は専ら航空母艦を中心とした機動部隊であった。真珠湾奇襲を成功させたわが機動部隊は南進してインド洋を席巻、太平洋の覇者として君臨していた。しかし1942年6月、ミッドウェー海戦で「赤城」以下の主力空母4隻を一挙に失うと様相は一変した。この時、完成のあかつきには、これらの空母の行動をサポートするはずだった軽質油運搬艦群はまだ建造のさなかにあった。

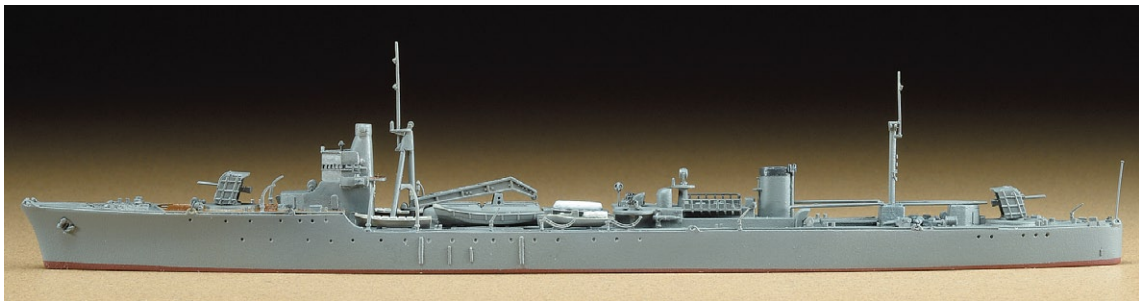
先に計画された「洲埼」より一足早く1941年7月8日に三菱長崎造船所で起工された「足摺」は航空機燃料油2320トンのほか、爆弾、魚雷、航空機用機材、食糧や真水など3229トンの輸送物件を搭載可能で大型空母2隻分を賄える補給能力を有していた。さらに艦内には航空機用発動機の整備工場もあり、さながら機動部隊の整備補給ステーションである。主要輸送物件の航空機燃料軽質油は別名「揮発油」の名が示す通り気化しやすく、引火すればたちまち大爆発を起こす危険物であるため、タンク周囲のガスの漏洩やポンプ駆動用のモーター等の火気の扱い、消火装置など、万一の事態に備えて特殊な装置を必要とし、船体も軍艦に準じた複雑な構造としたため、建造の進捗は順調とはいえなかった。その間、ソロモン諸島をめぐる戦いでわが航空隊の消耗は熾烈をきわめ、1942年10月26日、南太平洋海戦を戦った後は空母機動部隊の運用は難しくなっていた。

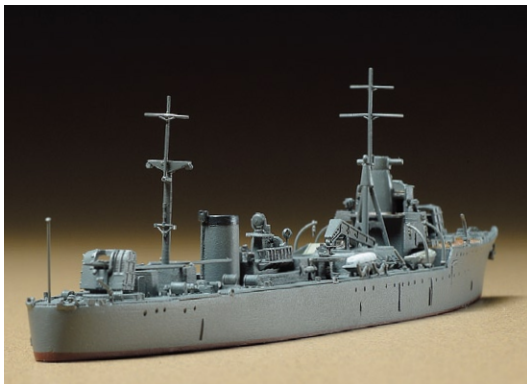
### ■軽質油運搬艦群の苦闘

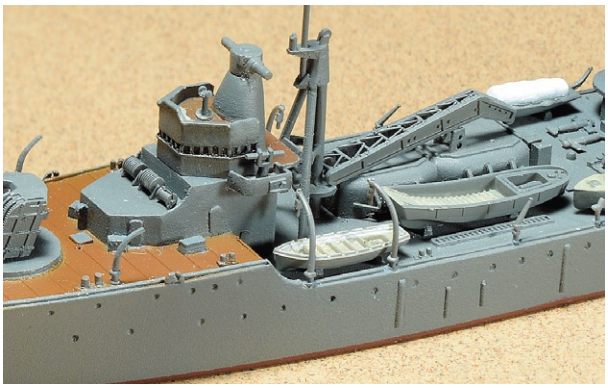
「足摺」がようやく竣工したのは1943年1月30日。同年5月に「洲埼」、9月に洲埼型2番艦「高崎」と続き、11月に「足摺」の姉妹艦「塩屋」が竣工に漕ぎ着けた時には戦況はますます悪化していた。空母機動部隊はすっかり鳴りをひそめ、計画されていた洲埼型3番艦以降は建造中止となってしまった。

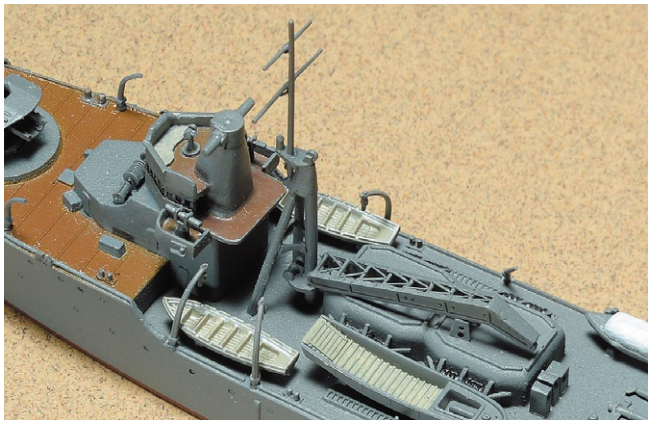
就役早々「足摺」以下の軽質油運搬艦群が投入されたのは基地航空隊への燃料や機材の輸送任務だった。敵の潜水艦や航空機の脅威にさらされながら内地から南方の危険な海域を往復する過酷な任務である。

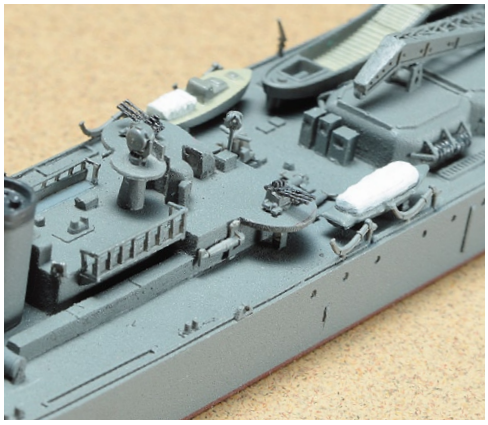
「足摺」は台湾、シンガポール、仏印方面へと幾度となく危険な輸送を成功させていた。1943年9月25日にはサ12船団に加わり門司へ向かう途中、米潜水艦「ボーフィン」に雷撃され、辛くもこれを回避したが僚船の特設運送船「霧島丸」を失った。年が明けても休む間もなく綱渡りのような航海を続けていた「足摺」だったが1944年6月5日、

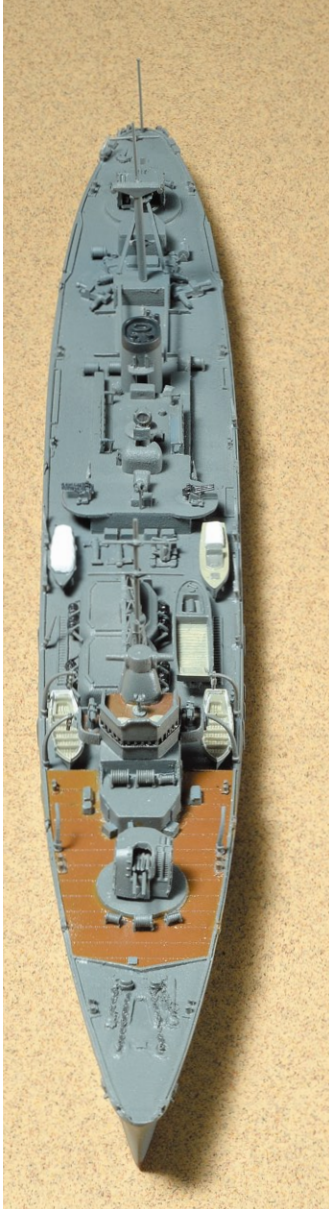












海防艦「干珠」に護衛され先にヤップ島を発った「高崎」に合流してフィリピンのスールー海を航行中、クラシアン島付近で米潜水艦「パファー」に捕捉される。「パファー」の放った7本の魚雷で遂にその命運は尽きた。竣工後1年半に満たない短い生涯だった。この雷撃で「高崎」も沈没。わずか3日後の6月8日には「塩屋」も米潜「ラッシャー」の雷撃を受け沈没。6月19日に生起することになるマリアナ決戦を前に4隻あった軽質油運搬艦のうち3隻を失ってしまった。

唯一生き残った「洲埼」は新造空母「大鳳」を旗艦にようやく再編成された第一機動艦隊の行動するタウイタウイに進出、特設給油艦「興川丸」と共に第3輸送部隊として「あ」号作戦に加わった。待ちに待った作戦参加だったが、米軍側から「七面鳥撃ち」と揶揄されるほどの大敗になすすべもなかった。この作戦を最後にわが空母機動部隊は事実上壊滅した。機動部隊亡き後も黙々と任務をこなしていた「洲埼」だったが1944年8月1日、ボルネオ島北東を航行中に米潜の雷撃を受け2本が命中。相手は「足摺」と「高崎」を屠った「パファー」であった。「洲埼」は沈没を免れ何とかマニラ湾にたどり着いたが、入渠修理中の9月21日、米空母機の爆撃を受けて大破炎上。10月4日に曳航出渠した彼女はカナカオ燈台沖に擱座放棄され生涯を終えた。

**■現代に生きる子孫たち**

世界に例を見ない空母機動部隊専用の戦闘補給艦として活躍すべく生まれたものの本来の任務を全うできないまま消えた「足摺」、洲埼型の苦闘ぶりは、戦局の推移に建艦が追いつかなかった帝国海軍の悲劇をよく表している。しかし、劣勢の中で自らの特徴を生かし、危険きわまりない輸送任務を黙々とこなした彼女たちの戦いはもっと評価されて良いのではないだろうか？　目論見通りにはいかなかったけれど、その着目点は決して誤っていなかった。「足摺」をはじめとするわが帝国海軍の軽質油運搬艦群は重要な特務艦として今日に生きる巨大戦闘補給艦の先駆けであったのだから。

## ■「足摺」を作る

2013年にピットロードから「足摺」のインジェクションプラスチックキットが登場して、またひとつジミ艦が身近な存在となった。実艦の資料としては姉妹艦「塩屋」の公式図が知られている。写真資料は「足摺」と姉妹艦の「塩屋」が各1葉ずつしかないが比較的鮮明で情報量は多い。これらを参考にしっかり作り込んでコレクションに加えよう。

**■船体**

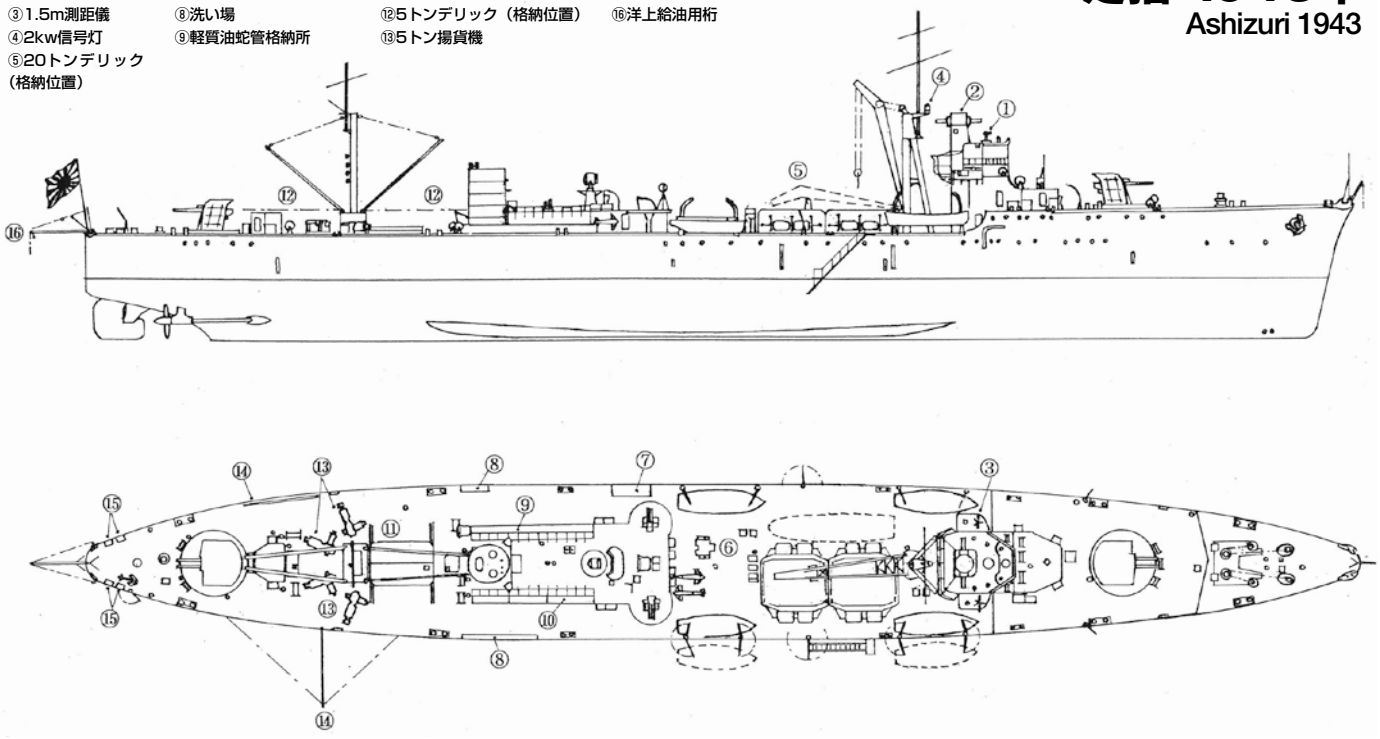
公式図と比較すると艦首尾の平面形が尖り過ぎの感がある。艦首は幅を増すと共に深いフレアとガンネルのナックルライン再現するために上端に0.5㎜角のプラ材を貼ってその下にパテを盛ってフレアを作っていく。艦尾は両舷に1㎜プラ板を貼り付けてヤスリで整形。クルーザースターンの緩やかな丸みを帯びたラインを再現する。艦首尾の修正で外板の継ぎ目などのモールドが消えてしまうので、すべて平滑として、汚水捨て管などを写真を参考にプラ材で取り付けた。

**■甲板、上部構造物**

船首楼甲板（A4）は揚錨機やホースパイプをプラ材で作り替えて立体感を増した。キットの上甲板パーツ（A3）はリノリウム張りの表現となっている。実艦の甲板敷物は不明だが、揮発油を扱うため可燃物であるリノリウム張りとは考えにくいので、リノリウム押えのモールドをすべて削り取り鉄甲板の表現とした。甲板室両舷の蛇管格納所は左右で幅が違うので右舷のものを削り取って1.5㎜角のプラ材に置き換えた。また機銃台下の半円形の窪みは埋めて平滑とし、機銃台の支柱は細いプラ材に置き換える。煙突後ろの倉口ハッチは屋根型ではなく平坦で、中央で分割され左右にスライドする方式なのでモールドを削り取りプラ材で作り替えた。浮舟の側面の防舷物もプラ材で作り替えている。煙突は左後方に烹炊所のH型煙突を追加。前方左右には汽笛管を取り付けた。

# 足摺 1943年
Ashizuri 1943

①探照灯管制機
②4.5m高角測距儀
③1.5m測距儀
④2kw信号灯
⑤20トンデリック（格納位置）
⑥12.7cm高角装填演習砲
⑦流し場
⑧洗い場
⑨軽質油蛇管格納所
⑩重油蛇管格納所
⑪倉口（マカンキング式）
⑫5トンデリック（格納位置）
⑬5トン揚貨機
⑭繋船桁
⑮爆雷投下台
⑯洋上給油用桁



**Specfication**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 基準排水量 | 7951トン | 主機 | 三菱マン式ディーゼル2基 | 航続力 | 5500浬/14ノット | 兵装 | 12.7cm連装高角砲×2 |
| 全長 | 133.0m | 出力 | 6000HP | 補給能力 | 軽質油2320トン | | 25mm3連装機銃×2 |
| 最大幅 | 16.8m | 速力 | 16.0ノット | | ／弾薬等880トン | | 爆雷投下台×4 |

## ■艦橋構造物、マスト

艦橋下部は甲板と一体になっているが、側壁のパーツ（C46～48）を取り付けると幅が広すぎるので、このパーツを取り付けず、艦橋後部はプラブロックに置き換える。手順が複雑になるので図に示してみた。前檣のデリックブームはトラス部分を細いプラ材で加工。2番浮舟上にレストを設けてここに固定する。

## ■武装その他

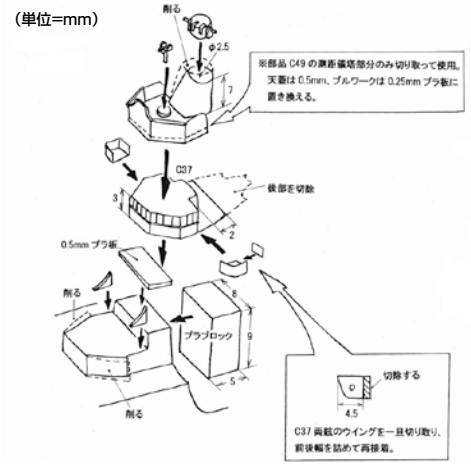
高角砲はピットロードの新WWII日本海軍艦船装備セット［3］（NE03）のものに換装した。但し、シールド側面のモールドが異なるので一旦削り落し、写真を参考に伸ばしランナーで作り替えた。揚貨機（C43、44）は実艦では4基設置されており、2つ不足するのでキットのパーツに似せてプラ材で製作した。艦載艇は中発を新WWII日本海軍艦船装備セット［6］（NE06）、9mカッターをファインモールドのナノ・ドレッドシリーズ、8m内火艇はフジミのものを流用。9m内火艇はウォーターラインシリーズ共通パーツのものを加工して使用した。ボートダビット、探照灯、防雷具は新WWII日本海軍艦船装備セット［2］（NE02）からチョイスした。

## 洲崎型給油艦

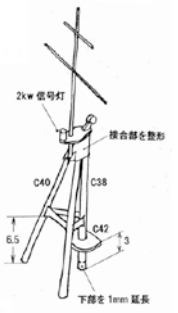
航空母艦随伴用の4000トン型給油艦。軽質油1080トン、航空機用潤滑油173トン、航空機用爆弾205トン（魚雷なら192トン）、生糧品8トン、真水53トン、航空材料5トンを搭載可能で、これは中型空母2隻分に相当し、足摺型のおよそ半分の補給能力である。ネームシップの「洲崎」は1943年5月15日に竣工。二番艦「高崎」も同年9月2日に竣工したが、剣埼（つるぎざき）、235号艦が神埼（こうさき）、聖埼（ひじりざき）、もしくは豊埼と命名される予定だった残る3隻は建造中止となった。

### 艦橋工作図

（単位=mm）



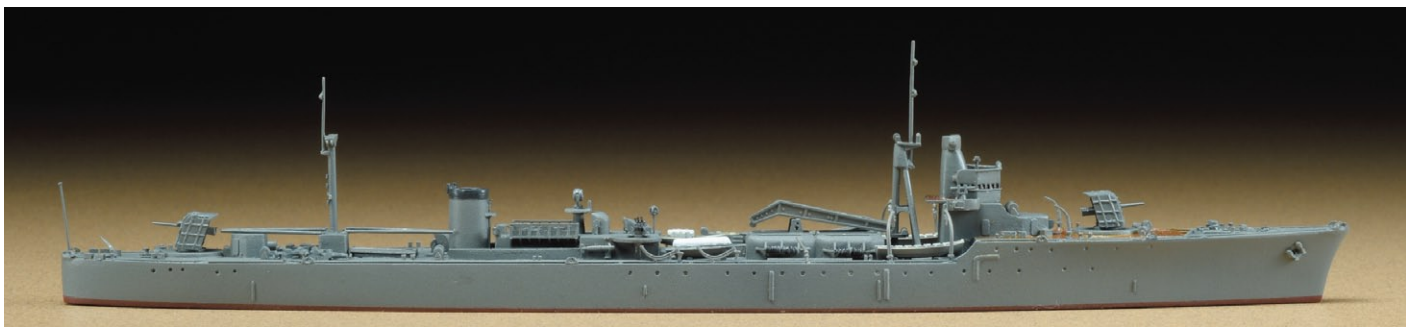

### 前檣工作図





■参考文献

昭和造船史別冊　日本海軍艦艇図面集　/　原書房
日本海軍艦艇写真集　巡洋艦　/　ダイヤモンド社
歴史群像　太平洋戦史シリーズ Vol.62 帝国の艦船　/　学研
世界の艦船増刊第47集　日本海軍特務艦船史　/　海人社
丸スペシャルNo.34　特務艦　/　潮書房
日本補助艦艇物語　/　光人社
聯合艦隊　軍艦銘銘伝　/　光人社

アメリカ海軍駆逐艦スチュワートDD-224/帝国海軍第102号哨戒艇
フライホーク1/700インジェクションプラスチックキットワード改造
US Navy Destroyer Stewart DD-224
/ Imperial Japanese Navy Patrol Boat No.102
Conversion from Fly Hawk 1/700 Injection-plastic kit,
Ward DD139 1941.

# アメリカ海軍スチュワートDD-224 帝国海軍第102号哨戒艇

## US Navy Destroyer Stewart DD-224 / Imperial Japanese Navy Patrol Boat No.102

**第二次大戦中、数多く就役していたアメリカ海軍艦艇の中でも最も数奇な運命を生きた駆逐艦。**
**彼女は不思議な縁で日本と結ばれていた……**

### ■DD-224 ~No name

1946年3月5日。前檣に長旗を靡かせ、後檣のガフに星条旗を掲げた一隻の古ぼけた駆逐艦がゴールデンゲートブリッジをくぐりサンフランシスコに入港した。武装はすべて取り外され、艦首には艦番号の224、舷側には日章旗が描きこまれている。彼女は艦名をもたない。四半世紀以上も前、アメリカで生まれた彼女は「スチュワート」という立派な名前を持っていた。しかし日米開戦後まもなく日本海軍の手に落ち、以降大戦を日本艦艇として戦った。終戦後アメリカ海軍に復帰した彼女の名はすでに新造の護衛駆逐艦に引き継がれていた。ゆえに彼女は艦番号のDD-224とだけ名乗っていた。アメリカ海軍に在籍した一千にも及ぶ駆逐艦の中で名前を持たなかったのは後にも先にも彼女ただひとりである。

### ■大正時代のトモダチ作戦

273隻もの大量建造が成された“平甲板型”駆逐艦の第3グループ、クレムソン級の33番艦、「スチュワート」。彼女が産声をあげたのは1920年9月15日。艦名は19世紀に活躍した海軍提督の名に因む。艦艇史研究家の田村俊夫氏によると、この艦名は当初DD-216のものになる予定だったが、度重なる変更でDD-292、DD-291と転々として最終的にDD-224に落ち着いたのだという。あまりの姉妹艦の多さに「スチュワート」と名付けられるのがどの艦になってもいい、とでもいうような没個性的なマスプロ建造艦の中にあって異彩を放つ彼女のキャリアは、就役後間もなくアメリカ海軍アジア艦隊の一員としてフィリピンに入港してから始まった。当時のアジアはまだのんびりとしてまるで東洋のリゾートのような日々だったが、1923年9月1日、未曽有の大地震がわが日本を襲い、首都圏は壊滅状態に陥った。関東大震災である。時のアメリカ大統領カルビン・クーリッジはただちに対日支援を決め、アジア艦隊に救援物資を満載し日本へ届けることを命じた。「スチュワート」はいち早く単艦で大連を発ち救援物資を送り届けた。横須賀に投錨した彼女はさらに被災者の救助や被災地の警備に協力するなど救助活動の立役者になった。彼女の献身により命を救われた人も少なからずあったことだろう。しかし彼女の日本との蜜月な関係は長くは続かなかった。震災から間もなく、度重なる内乱や軍閥の抗争などにより中国の治安が悪化、彼女は中国沿岸の警備に赴くことになった。1931年の満州事変を機に中国へ侵攻しはじめた日本も彼女の警戒すべき相手となっていった。

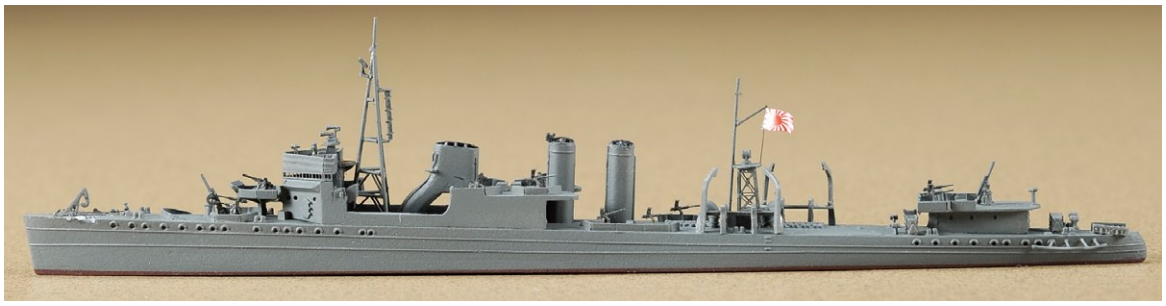
### ■バリ島沖海戦

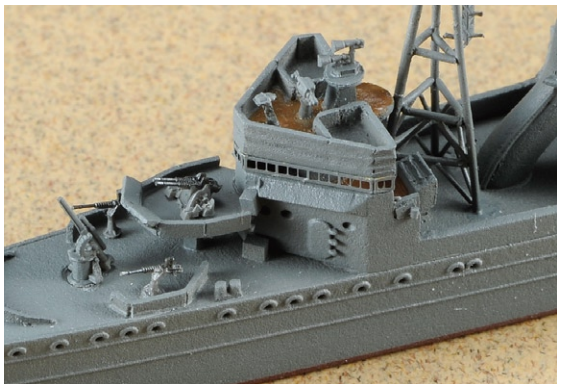
1941年になると「スチュワート」は行動拠点をフィリピンに移して時代のきな臭い空気を吸い込んでいた。やがて蘭印まで足を伸ばした彼女の任務は対日戦開戦後はオーストラリアへの輸送部隊の護衛や対潜哨戒など危険なものになっていった。

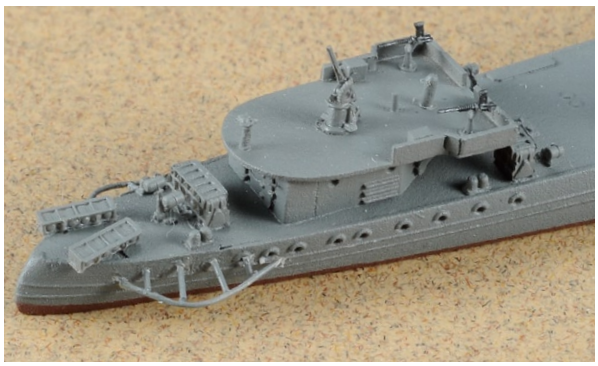
日米開戦後南進した日本軍はフィリピンのミンダナオ島を拠点に破竹の勢いでバリクパパン、パレンバンの油田地帯を確保。さらに英領シンガポールを占領して、いよいよ蘭印を攻略する足掛かりを確かなものにしていた。1942年2月19日、日本軍がバリ島に上陸との報を受けて、連合軍東洋艦隊司令官オランダ海軍ドールマン少将の指揮する艦隊が出動した。「スチュワート」はオランダ軽巡「トロンプ」を中心とした第二グループの先導艦として艦隊に加わっていた。艦隊がバリ島沖に到着した時、折しも上陸を終えた輸送船「笹子丸」が「朝潮」「大潮」の護衛で出港しようとしていた。先頭を行く艦隊の旗艦「デ・ロイテル」と「ジャワ」が砲撃を開始したが日本駆逐艦の猛反撃に遭い戦場を離脱してしまう。日本駆逐艦は返す刀でオランダ駆逐艦「ピート・ハイン」に魚雷を命中させ撃沈、さらに逃走する連合軍艦隊を追って「トロンプ」を撃破した。敵襲の報を受けた日本軍は先に出港していた「荒潮」「満潮」を現場に向かわせたところ反航して来る「スチュワート」「エドワーズ」のアメリカ駆逐艦に遭遇。激しい撃ち合いとなった。「スチュワート」は僚艦とともに勇戦して「満潮」を撃破。自らも舵機室に命中弾を被り、船体の各所に断片による被害を受けたが、辛くも戦場を離脱してスラバヤにたどり着くことができた。

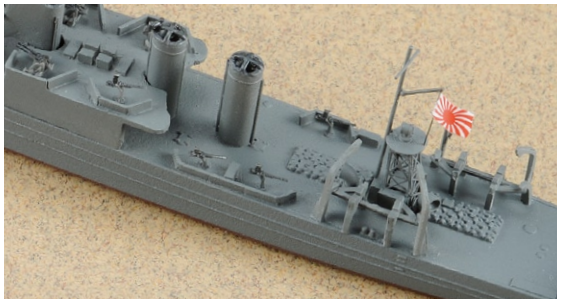
### ■「スチュワート」自沈す。

スラバヤに帰還した「スチュワート」は直ちに浮ドックに入渠したが、日本軍は目と鼻の先のバリ島まで勢力を伸ばし、もはやこの地も安全な場所ではなくなっていた。そんな混乱状態のためか入渠作業は的確さを欠き、彼女の船体はキールの盤木からずり落ち、左に傾いてしまった。この事故で左の推進軸が曲がり、船体も損傷した。バリ島から飛来する日本機の爆撃にさらされる中での復旧作業はもはや不可能と判断され、艦を処分することが決定された。尾栓を外して使用不能とした主砲を残し、武器弾薬はすべて陸揚げされ、艦









は放棄された。3月1日の爆撃でさらに損傷した彼女はもはや価値がないもののように見えたが、念のため艦内に爆薬が仕掛けられ徹底的に破壊されることになった。3月2日、連合軍のスラバヤ撤退とともに浮ドックもろとも自沈処分とされDD-224「スチュワート」はアメリカ海軍の艦籍から除かれた。そしてその名は1943年竣工のエドソル級護衛駆逐艦DE-238に引き継がれていた。

**■3本煙突の幽霊船**

1943年末ごろから、ボルネオやセレベス方面で哨戒活動に赴いた米軍の航空機や潜水艦から友軍の平甲板型駆逐艦らしい艦影を見たとの報告が幾度か届いた。当時、付近を行動する該当の艦はなく、何かの見間違いか幻を見たのだろうと一笑に付されたというが、こうした奇妙な話はひとり歩きするもので、「太平洋に幽霊船が出現する」という伝説めいた話が広まっていた。1944年8月24日早朝、アメリカ潜水艦「ヘイク」はルソン島付近を行動していた。寮艦の「ハーダー」は多くの日本艦船を撃沈した歴戦のつわものである。ルソン島西方で潜航を始めた「ヘイク」は2隻の敵艦を認めた。一隻は3本煙突で、当初軽巡と思われたが、どうも様子がおかしい。識別表を繰った艦長のブローチ中佐は苦し紛れに日本の同盟国タイの駆逐艦で3本煙突の「プラ・ルアン」と判断した。敵艦が爆雷を投下したことを察知した「ヘイク」は退避のため深く潜行。「ハーダー」は敵に3本の魚雷を発射したが命中させることはできなかった。敵は爆雷の投下を続け、やがて辺りには「ハーダー」のものと思しき大量の油と浮遊物が漂い、撃沈確実と判断された。

この謎めいた3本煙突の幽霊船こそ、「第102号哨戒艇」。れっきとした帝国海軍艦艇なのだった。1942年3月にスラバヤを占領した帝国海軍はあの「スチュワート」を再生させていたのだ。沈んでいた浮ドックを浮揚して、横倒しになった彼女を盤木に据え直す作業は困難を極めたが、帝国海軍は熱心だった。1年半を要し徹底的に彼女を改装し、整備を行なった。第一、第二煙突は連結され、4本あった煙突は3本になった。こうして旧「スチュワート」は1943年9月20日、すべての整備を終えて帝国海軍の一員となった。再生はなったものの老朽艦である彼女は着任早々から缶管漏洩のトラブルに再三苦しめられた。それでも彼女は危険極まりない護衛、哨戒任務によく働いた。戦後、「ハーダー」の撃沈は彼女の戦果と伝えられたがこれは事実ではなく、一緒に行動していた22号海防艦が挙げた戦果である。しかし、彼女の価値はこれで失われるものではない。1943年11月10日と1944年3月9日、敵潜の魚雷を2度も命中させられたが、そのいずれも不発という不思議な武運にも恵まれた。1945年4月27日には黄海方面で輸送船団護衛中に敵機の襲撃を受け損傷したが、見事1機を撃墜して難を逃れている。こうした危機を乗り越え彼女は終戦まで戦い、そして生き残ったのだ。

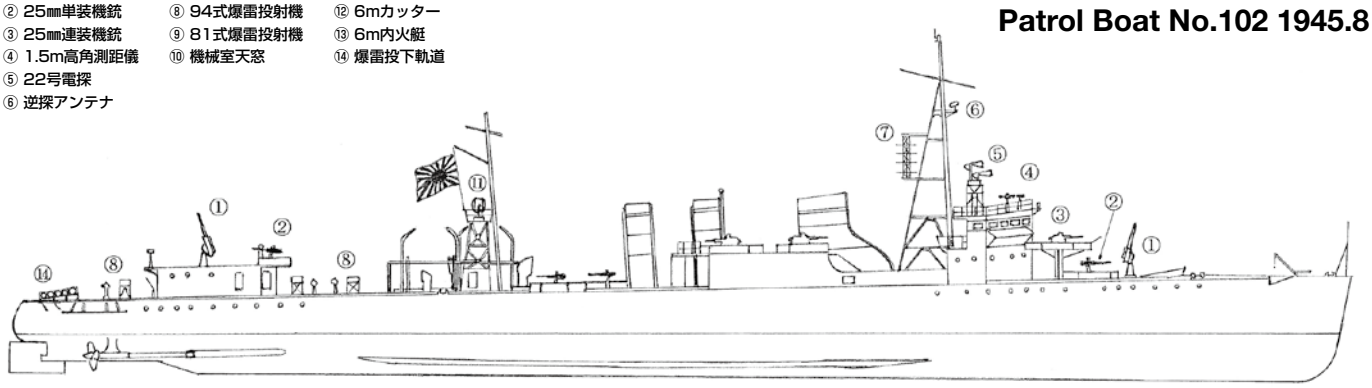
**■遥かなる故郷**

終戦後、呉に回航された「第102号哨戒艇」は進駐してきた米軍に発見された。この艦がかつて滅茶苦茶に破壊したはずの「スチュワート」であったことを知った進駐軍は彼女が完全に蘇っていたことに驚きを隠せなかった。1945年10月29日、アメリカに返還された彼女の再就役の儀式が執り行われ、元のDD-224の艦番号が付与された。艦名を持たない彼女は旧乗組員から“復帰した連合国軍人”を意味する「RAMP-224」と呼ばれた。11月に帰国することになった彼女だったが、元々故障がちな缶管と、長期間にわたるの戦闘のダメージでその体はもうガタガタだった。騙し騙しの航海で12月になってようやくグアムに到着したところでとうとう彼女は動けなくなってしまった。やむなく本国まで曳航することになったが悪天候などに阻まれ、やっとサンフランシスコに到着した時はもう3月になっていた。それでも彼女は歓迎された。“浮気なお転婆娘”のあだ名でマスコミにも親しみをこめて取り上げられた。鳴り物入りで帰国した彼女だったが、待っていたのは無情な仕打ちだった。帰国からわずか2ヵ月後の1946年5月24日、戦闘機のロケット弾の実験標的に供され、呆気なくカリフォルニア沖にその姿を消した。なお彼女の名前を引き継いだDE-238は記念艦として現在もテキサス州ガルベストン市にその姿をとどめている。何だか皮肉めいたメッセージを我々に伝えながら……。

# 第 102 号哨戒艇 1945 年 8 月

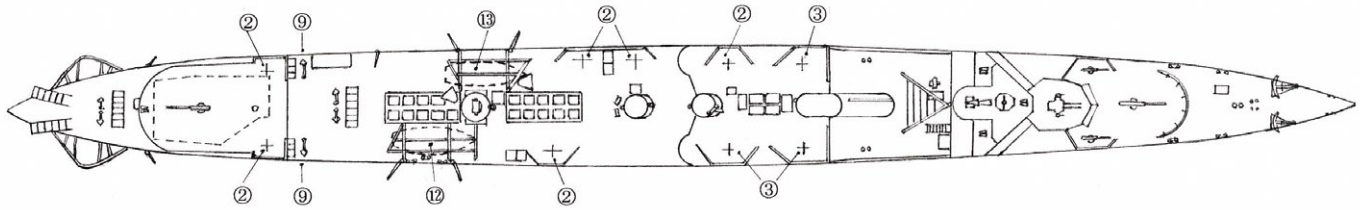
## Patrol Boat No.102 1945.8

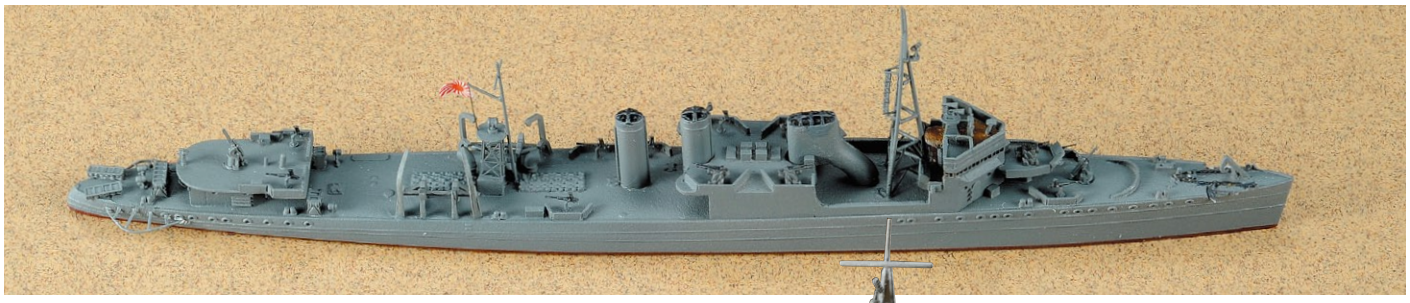
① 8㎝単装高角砲
② 25㎜単装機銃
③ 25㎜連装機銃
④ 1.5m高角測距儀
⑤ 22号電探
⑥ 逆探アンテナ
⑦ 13号電探
⑧ 94式爆雷投射機
⑨ 81式爆雷投射機
⑩ 機械室天窓
⑪ 75㎝探照灯
⑫ 6mカッター
⑬ 6m内火艇
⑭ 爆雷投下軌道



**Specfication**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 排水量 | 1215トン | 主缶 | フォスター式重油専焼水管缶4基 | 兵装 | 8㎝単装高角砲2基 | | 81式爆雷投射機2基 |
| 全長 | 95.83m | 主機 | ウェスティングハウス式ギヤードタービン2基2軸 | | 25㎜連装機銃4基 | | 94式爆雷投射機2基 |
| 全幅 | 9.68m | 速力 | 26ノット | | 25㎜単装機銃8基 | | 爆雷投下軌道2基 |
| | | 航続力 | 12ノット / 2,500浬 | | | | |





## ■「102 号哨戒艇」を作る

作例はフライホーク社のアメリカ駆逐艦ウイックス級「ワード」のキット。同社はエッチングパーツなどの金属製アフターパーツの販売で知られていたが高品質なインジェクションプラスチックキットもラインナップしており注目される。流通量が少ないので改造するのは忍びないと思われる方は『日本海軍小艦艇ビジュアルガイド2』で岩重多四郎氏がフルスクラッチビルドの手法を紹介しているのでこちらも併せて参考にしていただきたい。

### ■船体

舷側中央部の波返しのモールドを削り平滑にする。ウイックス級とクレムソン級では微妙にレイアウトが異なる。煙突位置を1㎜ほど前進させる必要があるので船体にモールドされている取り付けガイドを削り取る。この加工で甲板に穴があくのでプラ材で塞いでおく。2 ヵ所の機械室天窓のモールドは慎重に削り取って、1㎜前寄りに再接着する。また全ての魚雷発射管と右舷前部のボートダビットの取り付け穴を埋めておく。

### ■艦橋・セルター甲板

艦橋下部と一体モールドのセルター甲板のパーツは、直前のブルワークの部分を一旦切り離し1㎜短縮して再接着する。またセルター甲板の天蓋は後部の形が異なるので当該部分をプラ板で改造している。艦橋は後部や天蓋の形状が微妙に異なるので写真を参考に手を入れている。艦橋窓の下の波除けフィンは前部のみ取り除き、そこへプラ板で機銃台を作り取り付ける。

### ■煙突・上部構造物

集合煙突はプラ材で2.5㎜、高さ㎜のブロックを作り、削り出して製作。第3、第4煙突はキットのものを高さを1㎜詰めて使用した。後部の主砲台はエッチングパーツの天蓋を使用せず、プラ板で作り変えている。

### ■武装・その他

武装はすべて市販のアフターパーツから調達できる。8㎝高角砲はピットロードの新WWII日本海軍艦船装備セット [3] (NE03)、25㎜連装および単装機銃、電探、逆探アンテナはファインモールドのナノ・ドレッドシリーズ、爆雷投下軌道、爆雷投射機および装填台は新WWII日本海軍艦船装備セット [4] (NE04) のものを使用した。


**■参考文献**

歴史群像戦史シリーズNo.51「真実の艦艇史」/ 学研
世界の艦船増刊　アメリカ駆逐艦史 / 海人社
NAVY YARD Vol.24 / 大日本絵画
帝国軍艦スチュワート / 出版共同社


資料協力　村田博章氏


## 帝国海軍の哨戒艇

哨戒艦艇とは一般には自国の領海や沿岸、内海、港湾などで防衛・警備・救難などの活動を任務とした艦艇を指すが、太平洋戦争期のわが海軍の哨戒艇という艦種は、主に旧式化した駆逐艦や鹵獲艦を改装したもので、峯風型駆逐艦を改装した「第1号型哨戒艇」、樅型駆逐艦を改装した「第31号型哨戒艇」などがあり、その任務は船団護衛艦や高速揚陸艦に相当するものだった。一部の哨戒艇は艦尾にスロープを設け、物件や兵員を揚陸させるための運貨艇（大発）を発進させる設備を持っていた。1941年12月22日、「第32号」（旧「萩」）、「第33号」（旧「葵」）がウェーキ島上陸作戦において強行接岸を敢行。同島に艦を擱座放棄するという決死の作戦を行なっている。

ISBN978-4-499-23266-1 C0076 ¥3800E

定価（本体3,800円＋税）

The World of Unfamiliar Ship Models that no one Ever Knew About

# ジミ艦2

～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～